

# Feature

国際連合教育科学文化機関(UNESCO)

## ユネスコスクール加盟校に決定!

昨年12月、本校が展開する多彩な国際理解教育活動が評価され、ユネスコスクールへの加盟が認証されました。これは中高一貫コース5年時に実施する国際理解研修での、国際ボランティアプロジェクト(マニラコース)の取り組みが高く評価された結果です。今後は世界180カ国、約10,000校のユネスコスクール加盟校との間で、情報や生徒・教員の交流が盛んになり、さらなる活動の広がりや教育環境の充実が期待されます。



▲国際ボランティアプロジェクトの取り組みと今後の課題について語る国際生。

### ユネスコスクールとは?



ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体「ASPnet(Associated Schools Project Network)」として1953年に発足。そのグローバルなネットワークを活用し、①世界中の学校との交流を通じて情報や体験を分かち合うこと、②地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すことを活動目的としており、世界180カ国で約10,000校が加盟。日本では807校(※2014年10月現在)の幼稚園、小学校・中学校・高等学校及び教員養成系大学が加盟しており、加盟を承認された学校を「ユネスコスクール」と呼んでいる。文部科学省および日本ユネスコ国内委員会では、「ユネスコスクール」を持続可能な開発のための教育(ESD)の推進拠点と位置づけている。  
(ユネスコアジア文化センター(ACCU)ホームページより)

2014年、中高一貫コースにおける「国際ボランティアプロジェクト(国際理解研修マニラコース)」の取り組みが高く評価され、名古屋国際中学校・高等学校が「ユネスコスクール」に加盟。

### ユネスコスクール認証の要因となった国際理解研修

ユネスコスクールへの加盟認証において、高い評価を得た中高一貫コースの国際理解研修プログラム。目的や期間によって4つのコースが用意されており、なかでも2011年度に始まったマニラコースは、国際ボランティア活動に対する理解を深めることを大きな目的とし、研修内容を認定NPO法人アイキャン(ICAN)と共同で企画する本校独自のプロジェクトとなっています。「貧困、差別、紛争といった社会問題が起こっている現場を目の当たりにし、現地の方の声を聞くことだけにとどまらず、問題解決のために活動している企業や団体へのインタビューを通して、社会問題に対して自分たちがどのようなアプローチで関わることができるかに重点を置いている点が最大の特色です」と語るのは、マニラコースの企画・引率に携わる内藤圭祐先生。生徒たちは2週間の現地滞在中に、学校、ゴミ集積場、大使館などさまざまな場所を訪問。たくさんの人とディスカッションを重ねながらその背景を多角的に理解し、問題を「自分の身近に存在する課題」と捉え、解決のために主体的に関わる方法を考えるようになってい



▲「自分なりの方法で国際社会と関わっていきいたい」と演劇部員さん(中高一貫5年)

きます。「貧富の格差や衛生環境など、日本との違いに驚かされることばかりでした」と振り返るのは、昨年の国際理解研修マニラコースに参加した生徒たち。なかでも、所得が低く学校に通えない子どもたちや、ゴミ処分場から金属片を拾って生計を立てている子どもたち、住居さえも路上生活を強いられている子どもたちなど、自分たちと同年代の若者が直面している困難な現実には、生徒たちに大きな衝撃を与えたようです。「マニラの中心地には繁華街もあり、多くの人が携帯電話を持っていましたが、そのすぐ隣に路上生活者や物乞いをする子どもたちがいる。今までも「知識」としては持っていましたが、自分の目で現実を見ることで問題の深刻さを知り、実際に苦しんでいる人の言葉を聞くことで、解決の難しさをより深く実感しました」と浅井杏介君。ゴミ集積場には日本から送られているゴミも存在するという事実を知らされたことも、問題に対する「当事者意識」を高めてくれたといいます。



▲「日本の常識に縛られず広い視点で世界を見ていきたい」と飯田裕大君(中高一貫5年)

### 体験を発信することで、学校全体に国際的視野が波及

また、子どもたちとの共同生活を通して、互いの立場から考える理想の未来や社会についても語り合った生徒たち。「路上生活を強いられることになった経緯や、子どもが働かなければならない理由など、問題の構造を理解する上でとても有意義な体験でした」と振り返る森本愛姫さん。特に「夢は家族と一緒に暮らすこと」という切実な言葉には、強く心を打たれたそうです。子どもたちから社会問題の現実を教わった生徒たちは、研修後半にNPOや大使館、民間企業など現地で問題解決のために働く日本人を訪問します。「いろいろな立場から問題解決に取り組む人がいることを誇りに思いました。なかでも、レストランで路上生活者を雇用し、職業訓練をしている日本人女性の活動には、きっと「自分なりのかわり方」があるはずだと勇気づけられました」と演劇部員さん。問題の多態を知り、その解決方法の見出し方を多角的に学んだ2週間の体験は、それぞれの進路や職業選択において大きな影響を与えたはず。研修を終え帰国した生徒たちは、自身の体験を意欲的に発信し、積極的な姿



▲「世界中のたくさんの人を笑顔にする活動がしたい」と森本愛姫さん(中高一貫5年)

勢で社会と関わるようになります。文化祭では研修での学習内容をパネルにして掲示し、路上生活者が制作したマスコット人形やキーホルダーを販売。購入者一人ひとりにフィリピンの子もたちの現状を丁寧に紹介し、たくさん理解を得ることができました。また、昨年11月にはESDユネスコ世界会議に出席して、研修での体験をもとに本校の国際教育への取り組みを世界に向けて発信しました。さらに、フェアトレードで輸入されたフィリピン産のパナナを使った文化祭の模擬店では、マニラ研修には参加しなかった生徒も企画から積極的に加わりました。「研修参加者の話を聞いて興味を持ち、自ら青果店へ取材にも出かけました。一人でも多くの人にフェアトレードに関心を持ってもらえるように、これからも自分にできる活動を続けていきたいです」と目を輝かせる飯田裕大君。国際理解研修を通じて、学校全体に波及している国際的視野の広がり。ユネスコスクールに認証された今後は、世界的な視点を持った学校との交流の機会が増えていくことが予想され、生徒たちのさらなる成長が期待されます。



▲「日本の恵まれた環境に感謝して一生懸命に勉強したい」と浅井杏介君(中高一貫5年)

## ～フェアトレード活動による国際貢献～

FAIRTRADE Activities

### 学び1 子どもが危険にさらされている現状の理解と交流による深化

#### 【路上の子どもたち】

- 『路上の子ども』とは? 危険と隣り合わせの生活 児童労働に関わる子どもは、親とともにまたは親の代わりに収入を得ることが期待され、幼くして路上での労働を強いられている子どもたち
- 子どもたちの収入源 物乞い、ジープニーの呼び込み、売春、軽犯罪等 有毒な化学物質による健康被害や地域差別の存在

#### 【路上・ゴミ処分場の子どもたちとの2泊3日の共同学習】



- 子どもたちがそれぞれの地域(路上、ゴミ処分場、名古屋)を紹介
- いくつかのグループになって、各自の生活環境や人生についての意見交換
- 各地域のニーズ[理想とする社会]の共有
- 理想の社会を築くための、一人ひとりの決意表明



地域や生活環境は異なるが、各自の夢や理想の世界は共通することを理解

### 学び2 企業訪問を通しての問題解決アプローチ

#### 【社会的企業】

- 社会的企業とは? 社会的企業の定義:社会問題の解決を目的として収益事業に取り組む企業
- Uniquease[ユニカセ]と路上/ゴミ処分場との関わり

#### 【非政府組織(NGO)】

- 認定NPO法人アイキャン(ICAN)の事業を通して見るNGOの活動



### 学び3 光楓祭(文化祭)での活動

- フェアトレードの紹介/身近な商品から フェアトレード認証ラベルを紹介(AEON、無印良品、カルディのチョコレートやコーヒー、紅茶など)
- 商品販売/ゴミ処分場で暮らす人々が作ったぬいぐるみやキーホルダーなど 現地で制作現場を訪問し、作り手の顔が見える自分たちこそ可能な、積極的な販売活動を行う
- クレープ販売/フェアトレードバナナ(特定NPO法人APLAを介して現地輸入)を用いた商品 クレープを買ったみなさんが、「おいしく食べる」+「国際貢献」を意識



生徒10人から、学年70人、そして国際貢献というポジティブな影響は∞へ!!

### 学び4 これから私たちにできること

#### 【中高生の「フェアトレード」認知度を高めたい】

- 中高生にとって、「実用的」で「可愛い」ものが良いのではないかと
- スマートフォンケースや、イヤホンジャックマスコット案などを現地へ提起

今後の課題/実用化への検討

